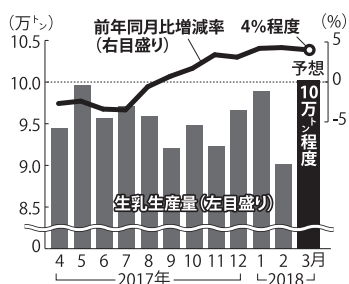
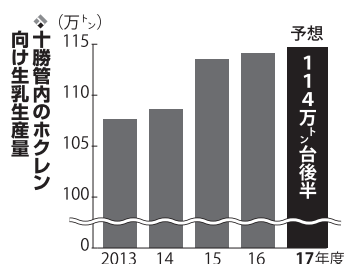


今年度管内生乳生産 過去最高へ 台風影響脱し回復 ホクレン

2018年3月30日

十勝管内の生乳生産量が急回復している。ホクレンが集計する2017年度の管内生産量は115万トン近くに達し、過去最高だった16年度（114万745トン）を上回る見通しだ。台風被害で16年度牧草の品質が低下し、月次生産量は昨年8月まで前年割れが続いていた。ただ、栄養価の高い17年度牧草に切り替わった秋以降は盛り返している。年度ベースの生産量は7年連続の過去最高となる。



「生乳」は牛乳や乳製品の原料となる。道内ではホクレンが大半の生乳を集荷し、乳業メーカーに販売する。管内は道内生産量の約3割を占める大産地だ。

今年度のホクレン向け生産量は、3月中旬までの累計で16年度比0.5%増の111万2333トン。3月1日の大雪によって一部の酪農家で停電したり、集荷用ローリー車の到着が遅れたりしたが、復旧は早かった。「集荷できずに廃棄した生乳はなかった」（ホクレン帯広支所）。今年度は最終的に、114万トン台後半となりそうだ。

1月以降は、前年同月比の伸び率が約4%と高い水準になっている。復調の大きな理由が飼料の品質だ。管内の酪農家は牧草、トウモロコシといった主要飼料を自前で栽培するところが多い。17年は天候に恵まれ、栄養価が高い牧草を収穫でき、搾乳量が増えた。

一方、トウモロコシは昨年8月の気温が低く、実入りが悪いものが多かった。栄養価の目安となるでんぷん含有率（水分を除く）は低めだったが、「不足分を輸入飼料などで補い、今のところ生乳生産に悪影響は出ていない」（管内酪農関係者）との見方がある。

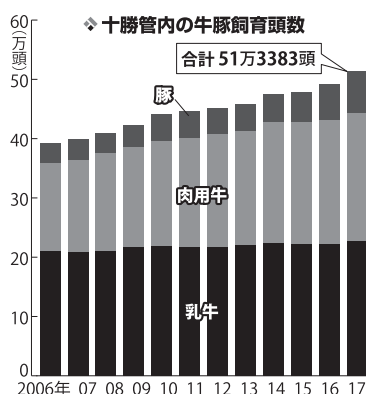
天候次第だが、18年度以降も増産基調が続くと期待する声は多い。大規模化に加えて、政府の補助金を使って搾乳ロボットなどの自動化投資に踏み切る酪農家が増えてい。ノベルズグループ（上士幌町）は、浦幌町内で2つの酪農牧場を相次ぎ開設する方針だ。

乳業メーカーや酪農生産者団体が構成するJミルク（東京）は、道内全体で来年度の生乳生産量が今年度見通し比1.6%増の397万6000トンと予測。生産の主力となる2～4歳の乳用牛頭数が増加すると見込んでいる。

牛と豚飼育50万頭突破 肉用の増加顕著 十勝管内で初

2018年4月5日

十勝管内で飼育される家畜のうち、牛と豚の合計頭数が初めて50万頭を突破したことが十勝農協連の調査で分かった。子牛相場が堅調で、高値で売却できることから、肉用牛の増加が目立つ。乳牛、豚を含めて生産者の大規模化が進み、投資余力が高まって頭数をさらに増やす好循環となっている。牛豚頭数は管内人口（約34万人）の1.5倍。ただ生産者の戸数は減り続け、担い手確保の課題が改めて浮き彫りとなった。



農協連が3月にまとめた「十勝畜産統計」で集計した。調査は2017年12月。農林水産省がまとめた全道の頭数（昨年2月調査）と比べると、肉用牛が道内の42%を占め、乳牛が29%、豚が11%となった。

肉用牛は約21万6000頭と過去10年で5万頭以上増えた。けん引役は大規模法人。ノベルズ（上士幌町、延興雄一郎社長）を中核とするノベルズグループはここ数年、規模拡大を続け、2月末の管内飼育頭数は黒毛和牛が約2500頭、F1など交雑種は1万6000頭弱に達する。

管内では「素牛」と呼ぶ生後1年未満の子牛が多いのも特徴だ。後継者不足などから道外の生産基盤が弱まっていることを背景に、十勝産の子牛の引き合いは強い。このため取引価格が高止まりし、自ら肥育するより、子牛として売却の方が経営効率が上がる。黒毛和種の素牛は1万4400頭と、生後1年以上の「肥育牛」の